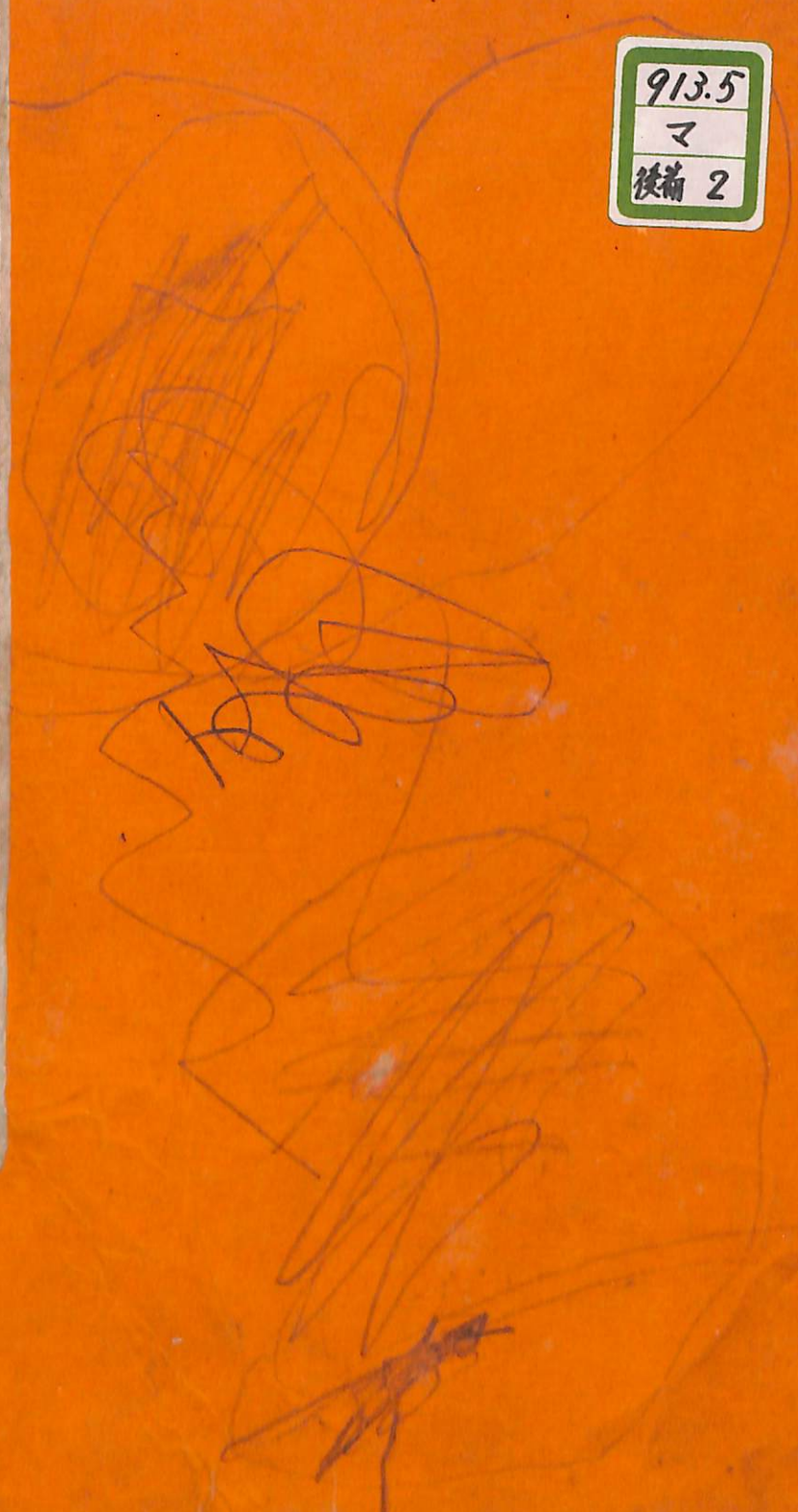


松浦佐用媛石魂録

後編

貳

913.5
マ
後編 2



支那

松浦佐用媛石魂録後編卷之二

東都 曲亭主人編次

第十三回

神明誠を監く烈女志と得たり

博多彌四郎が從僕等口不憶主の撃れし由と。淺聞と駭怕し本所へ歸らせし。且いや  
 頼川が宿所立寄。輝如此と報にければ。若黨俊平打驚さる。よしと秋布に報知せ。  
 腰刀を搦奪て。己れに續け。と云も訖らず。外面望み走出見。來つる博多が從僕も喘々ぞ  
 走りけ。且し俊平に撃せりける。彌四郎が亡骸と板戸小乘して。博多が從僕等扛  
 擔せ。涓然として歸り來つ。そが儘與小扛居るを疾く運ぶと秋布に。走るよりつゝ衣搔違  
 て。空に骸小攜着。よくとむりりよ泣沈むと。慰め難し俊平も。手と又みつ頭を低く。苦き胸  
 の憂也。隊也の關あらず。共侶。禁難たる涙。詰處に次房より。嘆きしつゝ來る者あ  
 り。便是別人ならず。博多倍太郎正延。重剛亮を聞せ。説使ふれば許し給へ。と云つ

座に坐を占む。秋布も俊平も。勝ぬ涙は推拭ひつゝ。且其来意を請問ふ。正延親と更め  
く。博多彌四郎素延事。御疑ひの一條あり。曩小鶴岡の神前へ。素延が進らせし。征備と一  
通の願書あり。其願文は。經高誅伏せずと云とも。瀬川采女を速よ。返させ給へ。と書たり  
とい。不忠の至。言語同斷。逆賊を内よ。主君を外よ致せし事。呪詛調伏小異あらず是  
より素延の。今日誅戮せしめ訖ぬ。博多瀬川が妻子等の。御咎の一條は。なほ重ね御沙  
汰あるべし。倍と慎てとるべたもの也。但素延が亡骸は。格別の義を以て。夜中竊ふとり  
殺る事と免さる。香華院へ遣すと云。送葬の營ふ。總便よまべた旨御説よ。よつて傳達す。  
此意を得られ候へと。いと嚴まど述べりける。登時俊平頭と撞て。御説承り候ひぬ。見ら  
る。如く秋布の。哀傷より。果敢々々。稟命まうまべくもあらねば。僕従の卑きも。  
憚と省す。代る疑惑のよしをまうさん。抑素延が願文は。經高誅伏して。吉次  
と返させ給へ。と書るよりの。某も。面をみ見候ひた。然ると誅伏せむと云とも。云云と  
あらん事心得がさく候。と云ふ正延頭と撞て。爾とも證據をけむ。申詳よあるべくも

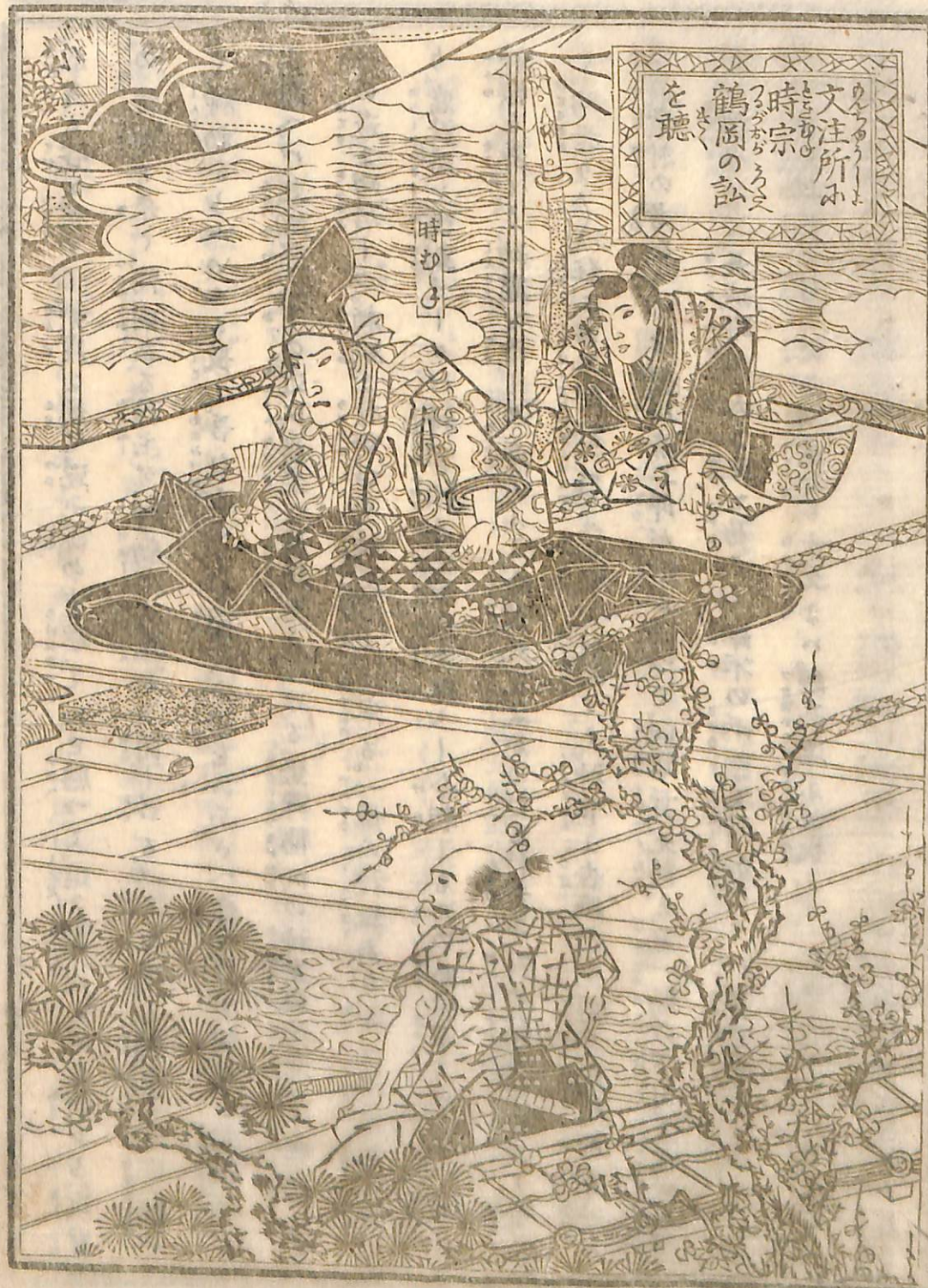
あらむ。素延不忠を存せぬ。我も亦よく是と知り。知りはる稟をよ由たれ。是禍鬼  
のさす所歟。吉次といひ。素延といひ。非命に終るのさならず。其家長く絶ん事。時節到来  
非ふ及ばず。俊平の總角より。あつ仕恩義も深う。主の後室と。補佐の任。和殿あらで  
誰やある。主家の艱を引受。亡人々の冤枉と。雪んととあをあらまわし。某とても  
親族の。縁坐より。御目前と。憚奉。籠居るべし。立歸り。後よ是等の事も。御意と  
得むやと思ふ。かされば。我身容られず。いうふ。我後と。憐む。暇あらんや。往來不通  
なるべたれば。此義も心得るべし。たや罷らん。と云うけ。大刀を引提。身と起せば。俊  
平も秋布も。承りぬ。と計。生平の親。中房も。輝更。と。恭しく。顔とづた。目送り  
ける。且。俊平の。秋布も。打對ひ。何と。思召。左も右に。心得難。後御  
願文の一義。雖不の。二字と。書加え。おん。参々。君と。罪を。せし。瀬川長城野が。徒。欺  
る者の所爲。よこそ。云ふ。秋布目と。押拭ひ。さき。其事。熟思。回。を。う。て  
て。也。い。効。推。より。書。讀。む。事。と。好。と。つ。歌。多。く。詠。う。べ。人の。討。の。鬱。悒。まで。筆。把

る事も多かりし。そが中お過つる歳。彼鼠川加二郎が。いと無禮ありしを懲らさんと。澤が  
尨弱不貝ある。比興と讀み當坐の一歌。東路乃多度通瑞籙名管你底。愛瀾詩神乃行惱鴨。  
萬葉假名ふ書倣しとる。紙扇と彼人ふ取せしより恨を合と寛と締びて長城野兵太と相譚  
つ。我君ふ聞えあげく。送ふ才と戦せし。其折ふ彼人々。いひがひもふくうち負く。贖  
罪を蒙る。此鎌倉を追きし。いよとますく。怒讐の思ひとなく。小動の磯邊隠ま  
に吾所夫を。狙撃しも歌の科。加以父大人の願文と偽筆し。竊ふ罪ふ墜せし。彼人々  
の所爲よあらん。縁故と推し時。鈍やこらひが賢才ごちて。いづてもあるべた人の非と  
誅誇つ。其人は。贈るゝととり親かりし。憎しと人の思ひ々。神も照放給はず。重ね  
ぐ。憂事の。此身ひとつ。衆合んや。かきま。良人と喪し。又父大人の罪か。いし。も。  
生才學ふ誇る。我身の咎である。かう悟るを。生かが。天狗道ふも墮ぬべた。此  
身の罪おそいと深けき。赤石の神の冥罰と。受ともよ。一生涯。歌と。ば。ま。書も視。悔  
の八千遍。百千とび。吾うら。こ。身と。限みても。返すよ。か。死。天の行。親と。良人と。先ごて。

いうでう存命侍らんや。と。た。口。説。は。く。打。泣。く。護。身。囊。の。組。紐。の。斐。し。素。る。く。婦。女。子。の。方。寸。  
刃を昇ると抜うけく。既し自害と見えし。俊平の吐嗟とむり。透さむ楚と推禁め。こ  
の御心や亂き々。家の難し己と諱。自ら罪かひ給ふ事。人の及ばぬよ。あまども。御身刃  
は伏し給ひ。誰う又彼讐と撃べた。伶俐けきども有繋の婦人。心と鎖め給へ。と。頻るよ  
諫めつ。奨し。つ。漸くは。拿。放。を。刃。を。輕。し。納。ま。は。扱。ひ。死。ぬ。る。も。死。ま。む。と。て。身。と。投。俯。く。泣。  
ふける。有爾程は俊平の。其實素延の亡骸と。并らんとく。準備と。つ。博多。瀬川。兩家の奴  
隸。は。代。と。る。輪。子。と。竊。し。擡。出。さ。し。つ。其。身。も。共。し。香。華。院。に。送。り。の。た。て。潛。や。う。は。經。と  
讀せ。更闌る。比。并。果。て。僉。共。侶。は。宿。所。に。歸。る。よ。秋。布。が。在。ら。ざ。ま。は。あ。い。い。う。よ。と。驚。き。く。  
彼此と素る程。春の夜あれば。えや。曉。り。御。咎。を。被。り。籠。居。の。折。を。ま。は。白。晝。の。索。も。あ  
る。り。ま。す。夜。毎。く。お。人。を。出。し。て。其。身。も。共。し。か。い。る。く。或。は。川。筋。鎌。倉。の。端。山。ま。ど。水。汲。經  
死。と。心。ま。う。け。く。彼。此。と。か。く。索。る。と。既。し。七。日。よ。及。べ。ども。其。亡。骸。も。見。る。ま。い。か。け。れ。ば。心  
の。憂。や。る。方。も。な。し。い。う。あ。れ。ば。斯。迄。は。執。念。深。禍。鬼。の。寅。縁。く。我。の。物。と。思。ひ。を。る。ぞ。や。主。と

博多の大人の横死に。仇と君との所行をまじ。脱走難たも理をまじど。後室さまい。おれと異也。嚮ふに憂ふ堪らね。自殺せんと給ひて。漸く諫め禁めしうども。猶死鬼に勾引きて。淵田お投と給ひ一敷。かくて頼む主もか。速に追服切。恩義と泉下お報せんものを。思ひ訣めつ坐と占。既乃刀お手とうけいと。怒地お思ひうへせば。主の仇人のおほ一箇皇土の内とよも去ら。いうで鼠川嘉二郎を。撃果て後こそ。死生と其處は定ん。と尋思とつと果敢なくも。其日を漸く消しけ。然バ又。執權北條時宗朝臣の。博多素延を誅せし。り。七八日と過を程。一日内管領頼綱を召近づけ。予が年米瀬川吉次と。不便の者お思ひ。い。渠が才を愛まばあり。さほふより。曩は經高征伐の。軍監は任せし。う。其功をたふあらねども。這回博多彌四郎が不義の科に。其婿ある吉次お溺愛し。る。僻更ふよつて。か。ま。亦吉次も縁坐の科にいかでか脱ぎん。渠は既お歸府の道中。動の磯の邊ふ。鼠川嘉二郎等お撃れし。其聞えありと雖も。妻子も慙むべ死者ならず。逆世帯と官籍し。道放すべし。と仰る。頼綱はこまらよしを。あうるべし。と思ねども。嘉二郎が更お拘ひ。

我身も咎と被し。先度は懲て遂お諫めす。承しぬと應つ。退き出んとする折う。近習の侍。走り来。鶴岡ある神主が。神勅の注進あり。聞し召るべうも。と報る。時宗駭し。神勅あらばいと畏し。吾自らよしと聞ん。使者をおふとへ參せよ。と回答。文注所に出給へ。頼綱等以下の近臣。當坐は扈從と取りける。登時鶴岡の神主の使者。海邊甲。養子の邊は躰居し。頼綱は打對ひ。神主言上し奉る。一條の神教あり。扱も兩三日已前より。當社時々鳴動せし。神官怕ま。群議を疑し。今朝も卯の時の半より。十二座の神樂を奏し。神應と清しめ奉りし。今茲九才よりありける。行童お神の被らせ給ふと覺し。踊揚り。狂ふ事半時計。狂し妙音と發。神官は告給ひ。博多彌四郎素延の忠義素朴の者ありし。鼠川嘉二郎が恨よつて。同類貫九郎と云一個の下司は素延が願書と竊略せて。長城野兵太。文と易さ。雖不の兩字を増加し。其意炭雪の違ひいて。来て。素延無實の罪お死した。素延が本文は。經高遠お誅せし。云云とありけるを。よくも思ひ回さ。罪を死者と害せし。神は怒り人の恨めり。然ると又吉次が妻子をら罪を



忠貞の道修く廢きて、寛と伸る所なく。天災地妖屢々起りて、上下交危るべし。先非を悔過と改め、政道と正しくせむや。甚麼く、と繰返しは、いと爽やう告させ給へば、神官等、或は駭き、或は畏し。時と移さず是等の由と。そが儘注進し奉り、願ふに萬機寛容の。政よりあらまろけき。言上仍件の如し。と息吻あへを演るふあん。時宗主従打駭さく。送目と目と注一つ。怕れて各々黙然とる。そが中、時宗朝臣、小藤と礫と打鳴らして、諤るかな凡夫の裁斷。予も亦鼠川嘉二郎等に謀られて、良臣を害せし過失。神慮さこそ。と最も畏し。然れ共、當家の武運盡すして、不利は神の咎あり。いうでう懺悔せざるべし。かきまば瀬川吉次が、妻子追放の沙汰と止めて、宜く彼兩亡臣等が、後状いとよく憐むべし。平左衛門(頼綱)の予が名代。速に社參し、幣帛と奉り、神責を謝し奉れ。予も明曉の參詣せん。使者もまづよく此意と得。神官等、報知せよ。と辭せし。下知しつ。身の暇と賜ふふあん。使者の歡びと退き出。頼綱もろが儘、走り宿所退きつ。行水く身を清め、三歳駒、鞭杖鳴らして、鶴岡へ參詣し、逆幣帛と進らせ。主君懺悔の情態と

黙禱しければ、行童の忽地鎮る。衆皆安堵の思ひを合せり。有如此程、時宗朝臣の頃日家、籠居る。博多倍太郎正延と召出し。八幡宮の神勅の、奇瑞の由と聞え給へば。正延の駭然と。且怕し、且歡び。頻り小藤の進むと覺す。時宗重ねて、吾吉次素延等が、家督の事と思へども、渠等小兒なきをいうが、いせん。但吉次が妻、秋布の。南殿も愛させ給へむ。宜く扶持し得さすべし。其餘の事の云々と、詳に聞へ知して、立んとせしを呼留め。汝再び彼處に到らば、よく秋布、此意と傳へよ。心得る歎。と又繰返し。説示し給ふふぞ。正延はよく歡びて、えや御前と退出は。瀬川が宿所へ赴きける。案下某生再説。瀬川が若黨村澤俊平の。秋布が往方と索うねて、夜も通宵いねられず。思ひ疲れ、目睡せん。其曉の夢の中、それうと曉るよ。あきば。兩三箇の奴隷を將。未明、復興と昇しつ。鶴岡の社頭、小到り。籠堂をさし、聞く。秋布のいとさう。疲勞する面色、荒建の上、ふをり。この什麼、いふ。と駭さく。まづ其故と諮る。秋布の、箱頭と撞く。いぬる夜、己らに告を。こゝ小籠にて在り。然る便、思ひまけ。鶴岡和殿、いひつる如く、不幸の上。

不幸災累一。家難の生才學博士態なる己らに科ぞと思ふ。此身の恨しく自殺の覺期  
 と志されども。太く和殿に諫められ。志と得果さむ。あうりとも父大人の冤枉を雪めず  
 存命於とも其甲斐あり。神佛未だ棄給ひむ。祈る小驗ありらんや。と思ひ起つ親良人  
 の忌服の怕まの有あがら。迎も己が身と贅ふ。死ぬるに憚ることある。鶴岡ある大  
 神の社頭祈念と疑さんものと。深念とつ走り出。かの宵より食と斷。己が親  
 の枉冤の當社願書と奉。其吏より發りふけむ。倘えうらむ。神罰を受べ  
 死罪と犯せ。歟。然らむ親の枉冤を。解諦させ給へう。そき將神の威徳も。及ばせ給  
 ぬものならば。秋布が露の命と。七日の間取らせ給へと。丹精と疑らむ程。社壇折々鳴  
 動。神樂の行童大神の被せ給ひ。託宣あり。其故如此。と。宮奴の罵駭ぐ。原  
 米念願驗あり。空。うらむと思ふも。いと憑しく。歡しく。いうで宿所へ歸らんとおも  
 へども。身の疲勞あり。往も得着う。で道路。倒る事もありませんと。己が身を。陸  
 ころ。おは躊躇て在る。さても和殿。いう。こころ。こころ。こころ。よく知り

と。索米つる。知らむ。準備の驕子さへ。昇。得米ま。たふ。是も不測の吏。ころと  
 云ふ。俊平駭歎。世る。や。澆季。及ぶ。雖も。月日の未だ地。墜給ひ。こころ。ます。く  
 神國の靈社の奇特顯き。然る應驗と得させ給ふも。是深信の致を所。そき。あり。て。僕  
 の。おん身の往方を索難。此曉の夢心。公然。一箇の老翁枕方。立在。我の主  
 の秋布が。往方を。欲を。準備の復興と齋。と。鶴岡の社頭。起き。籠堂と  
 関へ。遅く。怨。あらん。と。云歟と思へ。夢覺。こころ。平支。非。と。形の如く。こ  
 計ひ。竊。御迎。未。見。正夢。果。違。豫。憂。堪。ね。淵。四。や  
 授。給。ひ。亡。給。ひ。と思ひ。けれ。こころ。を。う。けて。索。り。ける。こ。こ。こ  
 將神の示現。よれり。いと憑。候。と。告る。秋市。彌。感。一。奇異の思ひ。つ。復  
 興。扶。乗。られ。潛。宿所。歸。り。け。む。俊。平。秋。布。藥。を。薦。め。病。と。歎。らせ。さ。ま  
 ぐ。は。勅。程。通。夜。の。疲。勞。の。積。瘥。こ。心。地。清。々。あり。ふ。たり。活。處。小。説。使。と。博  
 多倍太郎正延。瀬川が宿所。米。臨。鶴岡の神勅。主君の恩命。素延の罪。を。と。愆。致。せ



一後悔の輝の趣親族の子を頼い。博多氏の跡をいも。立下さきんとある君命を。詳ふ  
 述傳へく。こまのさあらむ又一條の恩命こそといままかき。瀬川博多の家督の支其養嗣  
 の速ふ整ひ難た事もあるべし。倘秋布が宿願あらば。開届け得させんむ。と仰らむ候。と  
 告げふ歡ぶ秋布主従。鶴岡と君所の方と。彼方是方と伏拜む。感涙留めうねりしを。且  
 秋布の涙と歎め膝を進めく。正延ふ打對ひ。累々一君の寵恩生を牛馬も變るとも。報  
 奉るは足らむや侍らん。就て一つの願ひあり。良人吉次が當の仇。彼鼠川嘉二郎のえやく逐  
 電とされども。皇國の外よも出づ。とら幸ふく。甥々一た女子は生れ侍まども。和漢の史  
 傳に載せらむ。勇婦烈女の多うるよ。よや力の及むとも。志やい劣るべた。願ふい親と  
 良人の仇とる。鼠川嘉二郎を撃捕。亡魂を祭慰め。さく爾后に養嗣の願ひを。許させ給ひ  
 此上の御慈愛侍るめる。此議を稟させ給へう。と云ふ。俊平も進み出く。言あらう  
 候へども。僕に瀬川が譜筈。道孝吉次。主二代の恩殺し人。とありより。大刀抜く術も書  
 籍讀む事も。聊諳く候ひた。いりて今より秋布が。仇討の後見し。助細く。宿念と果させ

をバいうよ。主恩を返せよ。のあるべた。是僕が素懐。此義も合せ給へう。と。主従  
 齊一庶幾へ。正延屢々領さく。適微妙くい。いさ。り。憂樂共運る。よ。あ。た。己れも一  
 家の片隻おれば。面を起む貞女の孝烈。いうて。披露せざるべた。既より。鶴岡の神慮は。稱  
 ひよ。もあま。主従宿志と。遂ん事。今更に疑ふ可らむ。久後憑く候。と云ふ。歡ぶ秋布  
 主従。神の冥助の深信の。應報も侍らん歎。併。君の善政。解寡孤獨。至るまで。憐せ給ふ  
 なる。慈悲と。又其洪福を。鋒ともをべく。盾ともして。撃バ仇人と。撃ざらんや。とさく。免許の  
 御沙汰。俟奉るの。こと。と云ふ。正延。領さく。其義を。心得たり。君の待不樂給ひ  
 んよ。え。罷んと。身と。起。送迎も。重巒續の。折理正。た。武夫。式臺して。別。なる。有右  
 て。倍太郎。正延も。懸。君所。歸り。参りて。時宗。朝臣。如此。と。秋布。主従。願。ま。う。志。  
 仇撃の。更の。趣。と。具。聞え。あげ。う。時宗。聞つ。含笑。秋布。是。聞秀の。才女。深窓。の  
 書を。聞。歌を。詠。む。事。あ。ど。紫。女。清。少。も。取。ざる。べ。け。き。と。鋒。と。舞。大。刀。と。撃。る。武。藝  
 の。上。の。心。も。と。あ。又。彼。鼠。川。嘉。二。郎。の。憎。も。も。憎。も。飽。あ。た。伏。不。赦。の。罪。人。の。國。中。に。御。夫

一、搦捕せんとこそ思ふまき。か、まば秋布の萬里の逆旅に赴りむをも。居るがらよ  
 復讐の志を遂ん事。一兩年と過べうらむ。然れ共渠が願ひと聽ざらんも。亦勸懲は違  
 ふに似たり。其義にこれよく尋思して。後日の沙汰に及ぶべし。如此心得よ。と示させ給へ  
 ば。正延の唯々といふ。聽く宿所へ退出けり。有然程は秋布の籠居と許され。世間廣くあ  
 り。日毎に香華院に參詣し。親と良人の菩提と吊ひ。且其墳墓と造作し。多くは佛  
 事三昧。長き春の日を消すものから。仇討の願事。一日片時も忘る。事なく折々博多正  
 延。御沙汰奈何。と催促を。活處に北條上總公實政。西國より凱陣のよし。豫々其聞えあり。  
 遂に肆月の初をみ及びて。實政鎌倉に還著し。時宗朝臣に見參す。此日在鎌倉の武士執權  
 の家臣。御邸に聚合し。賀祝の饗饌あり。就中實政の御盃と賜し。祝儀の田樂と觀せし  
 めらる。辭畢し時宗の實政と近く招き。軍のやうと問給ふ。實政答申をやう。早春注  
 進任り。經高が軍師牛淵九郎の飛蘭渡の若し盾籠りを。瀬川吉次が計策ふより。牛  
 淵と欺引よせ。逆末の龍華よく。吉次是を撃捕訖ぬ。有然程は經高え。己が居城を引籠り

勢ひ既折けたり。其是を速攻し。速に攻撃す。いうよとされ。經高飛蘭渡の若し  
 拔き。其翼と失へども。おほ千餘騎の賊兵あり。力戦ふまらん。御方も士卒を多く  
 撃れん。か、れ敵の兵糧竭。進退其處に谷る時。一舉し。經高と虜とせん。と遠慮を  
 廻ら。稻麻の如く圍せ。夜の篝火と焼曉し。又折々鼓と鳴り。て攻蒐らんとする勢ひを  
 敵に示し。駭し。とさ。其自滅と俟程。一朝敵の城と遙に見る。早炊の烟竟は絶て。  
 馬の嘶く聲もせむ。原米敵の饑とめれ。疾攻破す。と下知す。バ。搦軍齊一閑と發りて。早雄の  
 若武者等。輕と涉し。塀と乘踏。幕直に攻著て。え。二の城門まで打破る。敵一人もあらざり  
 けり。この什麼と衆人呆きて。彼此と見うへ。二の城門の東の方。いと大きなる脱穴あ  
 り。原米早晚穴と穿ちて。彼處より落亡たり。まづ其與と極めよ。とて。一兩人と容きて見せし  
 一。大約に廿餘町にして。遙に城の背なる。海邊に脱門あり。彼處に殊に切所とて。戌の兵  
 と措ざりけむ。賊徒こきとよく知して。かう長やうなる脱穴と。幾日より穿かむ。こ、小  
 慮ひの足らむして。捕逃せしこそ朽とけむ。疾其往方を索よ。とて。八方へ部して。軍兵多

く出いつ、樹を伐り草を刈拂ふまで。隈もかく渉獵る程。彼此に懸き居る。賊兵夥生  
拘て。經高が往方と問ふ。初め城と落し時。皆散々ふあり。經高の何地行々。存亡  
定らるるをといへり。是より。まづ生拘を誅戮して。九州に徇知ら。骨相書をもて經高が  
所在と穿鑿とれども。絶て往方と知るよ。あけき。逆徒の城と破却して。かくる凱陣  
任りぬ。悔らく。經高と。討漏し候へども。九州既靜謐。公私の大幸。此上あら。最勇  
ましく演説を。時宗は。打聞て。總州這回の軍配。意外に鄙怯かり。彼賊の軍師と  
聞え。牛淵九郎清繩。軍監瀬川吉次。計略に乗せられて。自ら首と贈る。不及びて。經高  
忽地膽と冷して。落度ととらん。速巻ふ。日を送り。渠に數町の脱穴と穿せ。い  
うよぞや。短兵急に攻蒐ら。躬方多く撃れんと思ふ。速應に然る事。或は水攻。或は火  
攻。方便と以て。攻破ら。躬方と損ぜむ。城と抜く。軍術のいくらもあるべ。然るを其識  
及む。矢種兵糧を費。賊首經高と走らせ。抑誰が怨どや。四境一日も靜  
からね。時宗の一日も寢食と安うせむ。宵衣。旰食。國の大吏。拘ひ。士卒を撃せ

いと。とせられ。所云宋夏の仁。似。胡應ふ。候へ。と憚る氣色も。愆め給  
へ。實政いと。畏。重。陳むるよ。も。遂。席。も。堪。や。あり。々。ん。暇。申。退  
出。是。より。病。病。假。托。長。く。出。仕。も。せ。ざ。り。け。實。政。の。事。此。下。は。話。ふ。且。て。時  
宗。の。御。後。方。は。侍。り。博。多。倍。太。郎。を。見。り。實。政。が。這。回。の。不。覺。と。い。ひ。が。ひ。か。一。と。思  
ふ。も。惜。む。べ。き。者。の。只。瀬。川。采。女。吉。次。渠。實。政。に。從。ふ。始。終。彼。處。に。在。ら。ん。よ。必。よ。く  
實。政。と。諫。め。經。高。と。虜。ま。あ。つ。べ。い。己。秋。布。が。情。義。に。感。ず。て。吉。次。と。召。還。せ。い。千。慮。の。一  
失。臍。を。噬。む。の。と。汝。の。盟。已。比。及。秋。布。と。俊。平。と。相。具。一。と。出。仕。せ。よ。と。辭。せ。い。聞。え。あ  
ら。又。頼。綱。と。招。き。近。づ。け。經。高。追。捕。の。一。條。に。忍。諸。を。可。ら。せ。國。中。下。知。を。傳。へ。捕。捕  
と。進。ら。せ。あ。武士。の。御。家。臣。ふ。あ。さ。る。べ。く。庶。民。か。ら。賞。錢。と。賜。ふ。べ。一。罪。ある。者。と。云。と  
も。功。よ。り。て。罪。狀。許。さん。此。義。と。え。く。徇。知。せ。よ。と。遣。る。隈。か。く。政。ち。此。日。の。藤。の。果。ま  
り。

かくく其詰旦博多倍太郎正延の。秋布主従と相具し。時刻を違へを参りし。時宗此  
よしと聞給ひ。文注所御出あり。秋布と近く召きて。汝女流の非力状もて親良人の復讐  
と願申を事神妙。是より。仇討免許の御教書をさし下さ。且盤纏の爲金二百兩を給  
ふもの。從僕俊平と心と合。仇人嘉二郎が所在と察。討捕し参。今より其期と俟  
どろいと。叮嚀御渡さ。御書と二百金と賜ひふたれば。秋布の歡し。只感涙小咽  
ぶのミ。世有難き君恩の謝びを聞えあげて。速侍小退出たり。此時内管領頼綱に秋布が  
若黨村澤俊平と。速侍小召登して。執權の仰と傳へ。汝主恩を思ふが故に秋布が仇討の供  
は立んと願ふ事殊勝小思召る。百折千磨の艱苦あふども。今の志と移さざし。主  
と佐々本意を遂よ。功よりて恩賞あらん。又一條。別小心得さまをさ支あり。逆臣平の經  
高の。城と棄逐電して。今小往方定らる。是より。國中は御られて。追捕の御下知嚴重  
。汝主従逆旅の間。倘經高が所在と察らば。たやく注進致さ。則是吉次が生前の素  
懐小稱ふ。莫大の忠節。此事の餘更ある状も。秋布の仰示さ。汝まづよく此意と得

て。秋布小達をべし。等閑は承。と繰返し。つと云渡せば。俊平歡喜雀躍して。稟命を  
申す所。秋布の文注所より退き。内管領小君恩の歡びと速く主従共侶君所ををべり  
出る時。正延は是と送り。此日の首尾の辱さと祝。俊平は又頼綱小傳達せられ。經高  
追捕の御下知を。秋布小告よける。有然程に秋布の宿所へ歸らんとし。思ふやう。近年  
来南殿の(時宗の母公前集小見へたり)御慈愛と被りし。い。仇討恩免の歡びを申  
すべく。生死不定の旅小あれ。見参し。今生の辭別とも申さめと。難く南の御亭小  
参りつ。執達の女房小云。云とまう。去らる。南殿歡び給ひ。邊近く招。不覺小涙ぐ  
あがら。漸く小宣ふやう。吉次素延等が非命の事。最惜む小餘りあり。親と良人と月の中。喪  
ひぬる。你的哀悼。今更小云。くも非。さ。孝烈の志を運う。仇討の義と聞えあげ。  
け。御免を蒙。近日。首途と聞けば。餘波惜さ。限りも非。只速小夙志と遂。歸  
り参ると。俟んの。其日を何時と揣。難。留別の見参。れば。寛やう。打相譚。人とも身  
とも慰めよと。御盃と給りつ。是よりの後。只。四表八景の物語。小長。春の。日もけふ

ぱうり。短一とあん思ひ給ひ。南殿の語次。又秋布小宣ふやう。そあさの風流の才聞。詩  
 出せる秀歌も多く。女博士とも云つべし。博識の人愈まきり。遣バ問んと思ひさる。二くどり  
 の疑惑あり。萬葉集。山のはあぢむらさのぎ去かれど。これの左夫思惠君。一在らねバ。  
 又あぢ集。あぢの住む渚沙の入江のごもり沼の。あかいたつう。みまひさよ。あぢ  
 むら。又あぢのむら鳥とも詠り。此あぢと云もの。鬼の一種。鬼よりの形状ちひさくよ  
 く群れ遊ぶものあるよ。を。こまも知まり。然れ共何より。あぢと云。此名義をいへ  
 るものか。又伊勢物語。夜もあけバ狐は食あんくごうけの。まごさよ鳴くせをやりつ  
 りかけバ。鶏と云とど。物ふの家鶏とも書り。この附會あるべし。催馬樂。にのどりのかけ  
 ろと鳴つと語へまバ。かけの鶏のふく聲よよ。名づけたりと云説。あまども。今鶏の  
 啼くと聞く。かけろとの聞えを。但しくごかけのくごの腐。罵り云辭。腐儒。又くさ  
 れ女あど云ふ同といへる一説。誠然あるべし。鶏とくけといふ支。あは採あるべく  
 や。考あらバ置土産。説諦。疑ひと釋させてよと宣へバ。秋布差さる面色。よて。頼づた

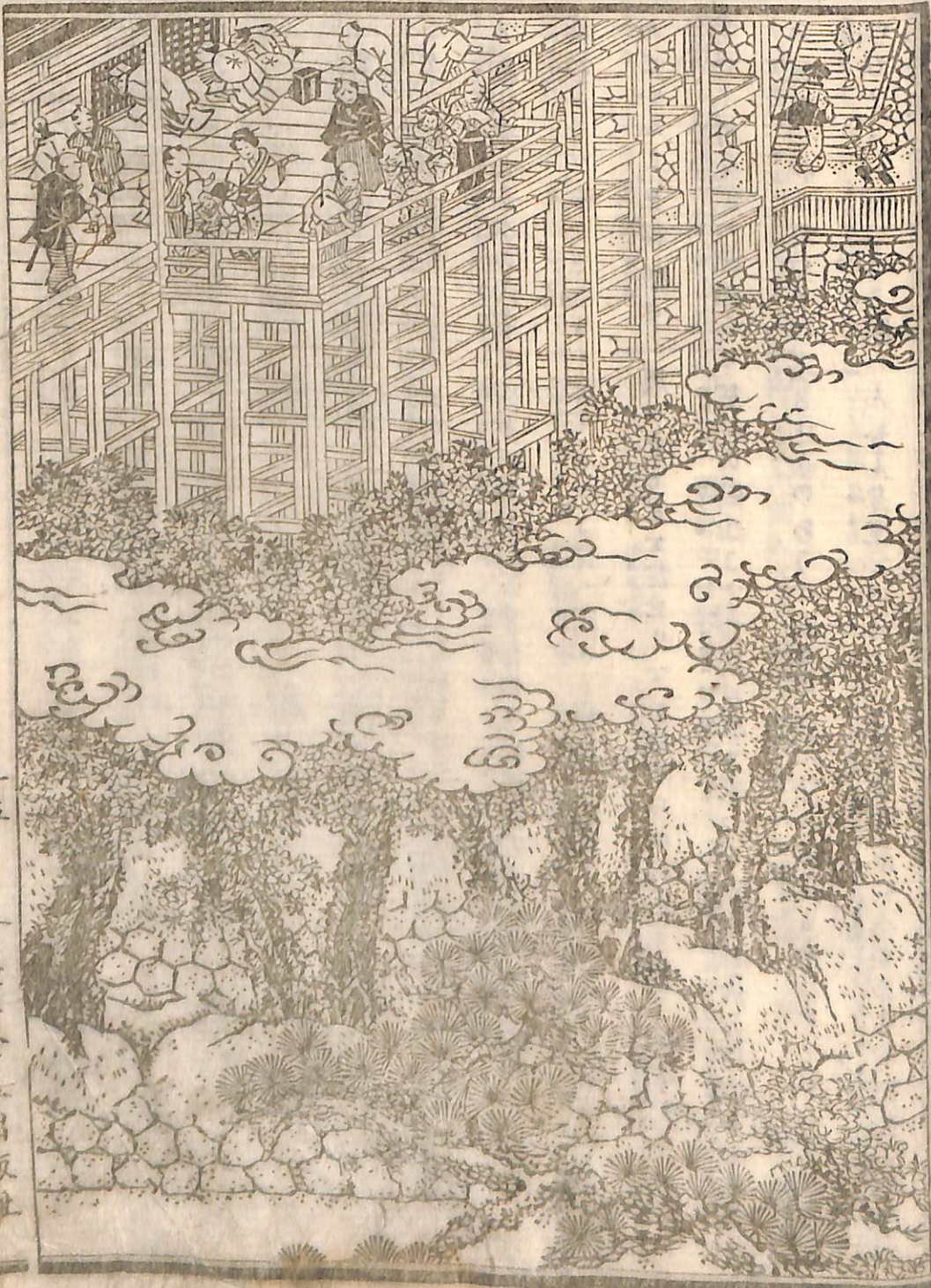
たる頭状。問せ給ふをかく申さバ。無禮ある。似て惶恐けれども。近層先非と悔よ。あ  
 りて。一生涯歌をバ詠ま。問る支と博士態。論をま。けれ。と誓ひ侍りた。其故の親と良  
 人。非命ふ世を逝侍り。始と推せバ。博士態さる。こらに。怒より起。侍りた。其事の  
 今詳ふ申あぐるも。益さるべし。況目今問せ給ふ。あぢとかけの名義の起原。つや。く  
 思ひがけされバ。考。事も侍らむ。旅宿の折博物家。値遇する事も侍りあバ。よく問質。く  
 歸府の日の。御土産。ころ仕らぬ。けふの許させ給へう。とあろる。推辭申せバ。南殿  
 領さ。彼知ると知ると。知らざると知らむとをさる。聖人賢者の心あり。你秀才あり  
 と云ども。知らざる事。あさふにあら。知らぬ事と知らむといへる。却。いと愛さ。又  
 只此義のさ。あら。婦女子の博士態さると。悔。今よりさる所行を。せま。たものぞと誓ひ  
 しい。是も亦愛さ。事。餘り。婦女子の才聞さる。淫奔からぬ者稀。衆女。清少。和泉式  
 部。小野小町の侍と見とも。貞操の方。疎り。你自ら非と知。云云と思ひ。人  
 の及。ぬ事。あ。現。婦女子。して。仇と撃んと欲する。男子の情態。文と。武。不。依。を

バ。よく宿望を果さんや。かこれバ你のきのふ迄の。秋布よのあらず。變成男子ありける者。と。風流の疑問を云出。思ひざりける吾身の。慙心裏。恥。た事。まあん。かうい。世尊。對。法門。かくるふ似。最。何。の僧正の隨筆。佛書。借抄。法華經の提婆品。八歳龍女成佛の一段を聞せ。今。你的心操。思ひ合。義ある。をいうふぞと推。見。諸法實相の法華。されバ。男も實相。女も實相。非男非女も實相也。さ。バこそ經文。若有聞法者。無一不成佛。とも説き。一稱南無佛。皆已成佛。道。とも説給へ。龍女の龍女の儘。して。成佛。べき。誠。ある。變成男子。ある時。是。男子の成佛。人の成佛。非ざる。此。所。異。釋。あり。理趣。釋。經。男女の梵語の。出。を。按。する。男。と梵語。云。云。女。と梵語。云。云。是。よ。觀。る。時。男女の梵語。一つ。女。人。の。し。と。い。ふ。一。點。と。加。え。の。の。し。点。の。也。とも通用。是。災禍。の。点。と。云。又。妄。想。嫉妬。の。点。とも。云。具。の。字。義。見。え。り。有。如。此。者。八。才。ふ。り。ける。龍。女。が。法。華。の。諸。法。實。相。の。大。旨。と。了。得。か。バ。一。切。衆。生。悉。有。佛。性。龍。女。も。佛。も。差。別。なく。凡。夫。も。佛。煩惱。も。菩提。妄。相。

も實相。澁柿も甘乾。善惡の不二。邪正も一貫。迷へバこそ小隔あり。と。了達。する。緯の。證據。小。渠。が。心。裏。の。明。鏡。と。釋。尊。の。齊。せ。を。如。意。寶。珠。と。進。ら。る。と。經。文。の。説。さ。る。也。摠。言。語。は。演。難。き。と。注。せ。ん。と。欲。ま。る。心。開。意。解。と。云。義。あり。叔。釋。尊。の。領。さ。龍。女。の。印。可。給。ふ。狀。迦。寶。珠。と。受。給。ふ。と。經。文。の。説。さ。る。の。是。心。開。意。解。あり。登。時。龍。女。の。角。折。さ。り。女。人。の。角。の。甚。度。ある。もの。煩。惱。妄。相。嫉。妬。執。念。愛。惜。の。心。則。是。也。此。五。欲。を。守。義。小。當。き。バ。彼。の。点。と。あ。ま。る。也。この。点。と。取。て。見。ま。便。是。又。と。ある。所。云。男子の梵語。云。云。迦。變。成。男子の義也。又。と。無。垢。と。釋。せ。る。あり。大。日。經。疏。第。九。小。由。る。又。と。無。也。の。塵。垢。也。略。え。い。へ。バ。即。垢。也。され。バ。こ。無。垢。世界。へ。成。道。佛。果。を。遂。さ。る。あり。南。方。の。果。德。と。標。無。垢。世界。の。男子。して。即。無。垢。執。心。也。然。ま。バ。心。の。迷。ひ。ふ。女。人。の。即。女。人。ふ。り。男子。も。亦。女。人。ふ。同。形。體。ふ。より。て。約。し。さ。る。名。義。ふ。の。あ。ら。を。か。より。新。婆。沙。論。の。劫。初。の。時。の。男。女。の。形。相。の。異。ある。事。を。説。さ。り。涅。槃。經。の。善。薩。品。の。如。來。の。常。住。佛。性。と。知。ま。る。者。の。女。人。も。男子。と。名。づ。く。と。説。り。か。これ。バ。其。形。狀。こ。男。女。と。う。こ。ま。ど。も。心。の。あ。ど。り。隔。

あるべき。女人成佛疑ひあり。と説給ひしを今こころ無思ひ合まき。親と良人の仇敵を狙撃んと文辭を損ぐ。今より武支ふ名と揚べれ。你の變成男子也。さきばかり風流の技のし点と除祛く。武藝の元と宗と一つべき。仇討の首途。餞別取らせんと。かん磨近小措置さる。護身刀を取あげ。是れ是命婦丸と名づけさる。筑紫鍛冶の業物也。長一尺二寸ふり。鞘は銀の猫と附さり。よそ一院の愛させ給ひ。韓猫の故事も。命婦丸とい名づけさり。此逸物の猫とも。彼鼠川と撃捕ん。勝むと云事ある可ら。是れ愛さしと。祝し御刀と賜せければ。秋布の遠く。左右の手は受捧。感涙の進むと覺えむ。そが儘刀と腰に帯。身の暇と請申。は宿所へと。退出ける。有如之而又秋布の俊平と相計ふ。親と良人の七七の追薦佛支の隔昨果一つ。御法の首途引更。修羅の巷へ旅衣。とつとさきばかり。博多正延と相譚。奴婢等より。食身の暇と取ら。瀬川博多の兩屋舗。正延預け置。行装と整へ。其晚は俊平と。主従二人位馴ま。鎌倉と立出て。萬里の逆旅。博多倍太郎正延。腰越送送り行く。遂は袂と分ちたり。

有然又秋布の。往方定のぬ旅。一あきど。京師の究め。繁華の地あり。且に彼處へ趣り。仇人の所在と探知る。手がかりのありもやせんと。俊平が云ふ任。東海道と百十數里。野を過。山をうち踰。露は宿。風は梳。狎も習。草枕旅。寝の憂と身。知る草鞋。足と傷らま。秋は路傍の。草の葉と鮮血。深の。孤村に宿。と投りねて。夏の宵の月光。送られ。秋布の容止のいと美麗。さか人目ふさ。あるとき。笠を深く。或とき。虫の垂衣。面と聚み。道中大約十日。恙なく京師に至り。三條大橋の邊。客居に宿。日毎に神社佛閣と。仇人の所在を。知させ給へ。と祈ざる日。六條の妓院。四條の勾欄。行客聚ふ所。殊更。眼を。駐て。仇人嘉二郎。似たるもの。ありや。と機を配ると。四十五日。及べども。思ふ人。も得遭。かれば。浪速に赴き。亦彼地と索んと。既。京師と立ける。朝。秋布の。日比信。清水寺の。觀世音。今一と。び詰。八幡山。八幡宮。鶴岡の大。神と。同神。と。い。ま。ま。ま。彼。神社。へ。も。參。ら。ま。し。と。只。願。い。ふ。ふ。より。俊。平。も。そ。の。意。



十五

東海道五十三次



大和...



は任まかし。先清水まづきよみづへ參請さんけいを。素もとより急いそがぬ旅たびをまき。舞臺ぶたいの繪馬えうまとうち瞻あがめ。音羽ねはの曝布たきの  
邊へたに到いたる。小せし年尚弱ねんじやうじやくき。一箇ひとの行客ぎやく。伊勢度會いせわたらひの太神宮たいじんぐうへ脱參だつさんせしもの。よであらむ。綱太麻つなたまと  
りいふものと。挿はさみたる薰菴かむろを背そむけ負おふて。栲たへの汚垢あかし漆したる脚絆きゃはんの紐ひもを。脛高はざたかに結び。同どう  
行ぎやう二人ふたりと寫かしとる。管笠びげがさと圓坐ゑんざし。件くだんの曝布たきの邊へたに小せしをり。手てふ取る。慕縁むいげ柄杓ひさくを。うち仰あう  
を曝布たきよさし寄よせ。受うけはく。志しをく。頭かづと敲たたき。音うま冷つめたしと稱たへつ。三抄みさいむりりうち飲のみ  
ながら。秋布あきふを見みりへり。女中にやちゆうの鎌倉人かまくらびとよとていまる。あらん。今いま鎌倉かまくらの。執權しやくけんの御内人みうちびとを  
る。瀬川せがわ采女さいによ吉次きちじの内室ないしつに。博多秋布はくたあきふといふ才女さいによあり。和漢わかんの書籍しゆきと胸むねに藏かくめ。女によ稀まれある  
博識はくしきあるが。歌うたとさへよく詠よめむ。と灰ほのかは傳つたへ聞きたる事ことあり。定さだめく知識しちきは。おうといまる。あら  
めといふ。主從しゆじゆう駭おどき。思おもひをも目めと注あせし。おほ然おほらぬ面おもて色いろし。俊平しゆんぺい可かとうち  
笑わらひ。否いな俺われ們らの相摸さがみある。貧評ひんひやうの郷士ごうしよ。京師きやうし見物けんぶつよ求もとめる。鎌倉かまくらとい近くもあらぬ  
ふ。風流ふうりゆうの技わざは疎うそけま。去さる才女さいによのありや。傳つたへ聞きたる吏こもあらむといふ。杜わかう校くわう冷れい  
咲わらひ。うの虚言そらごふ候ときにん。おん身達みたちと。はらへ見る。村落むららくの人ひとよあらむ。隠ひそ給たまふ。遺恨いこん

よこそといふ。俊平しゆんぺいいよく呆あま。いう。はらへ疑うたがはる。とも。鎌倉人かまくらびとよあらむ。列れつ  
ふいふべきよ。も。和郎わらうの又何またいづい國人こくにんよ。秋布あきふとやらんと。詰つめる。と問とりへさき。うち  
微笑ほゑ。吾儕わがらが故郷こきやうの筑紫つくしよ。一農家いんのうかの小厮こもの也。伊勢參宮いせさんぐうと思おもひ起おこす。乞食こじきを。から詰つめ  
る。へさ。京師きやうしと見みやと。名所なご古迹こきを。尋たづね。又またいく。くの日ひと過とせり。見みらる。如ごとく  
年としも弱わかく。ま。も。賤いやしき。吾身わがみながら。書視しよしる事ことと。好このむ。甲斐かひ。或あるは。故事こじ。物ものの義理ぎりを。穿鑿せんさく正ただ  
を。事ことを。好このむ。鎌倉かまくら近くある身みあらむ。秋布あきふどの。面おもて。問とま。ほしき事ことも。あま。思おもひ。ね。つ  
ふ云いふ。と。おん身達みたち。詰つめ。といふ。俊平しゆんぺい又駭おどき。そ。疎うそ勝かちある事こと也。り。俺われ們らの。兩刀りゆうたう  
を。人ひと。お。み。帯おびる。の。武藝ぶげいの。吏ち。些ち。は。り。心こころ。が。け。あ。ま。あ。ら。ね。ど。も。文ぶん。學がく。の。勸學院くわんがくいんの。宿しゆく  
よ。も。劣おとり。と。り。誘退いざまから。ん。と。秋布あきふ。密ひそと。注目ちゆめくし。け。ま。ば。秋布あきふ。の。ま。こ。ろ。と。得え。先ま。立た  
つ。主從しゆじゆう二人ふたり。清水坂しみずざかを。下くだり。たり。か。く。その。道みちを。が。ら。俊平しゆんぺいの。嘆息たんそく。あ。つ。秋布あきふ。よ。讀よく。や  
う。音羽ねはの。瀧たきの。ほ。と。り。ある。彼脱社參あつたつしやまの。少年せうねんと。何なにもの。と。欺見かみ。給たまひ。々々。その。親おやを。賣うり。う  
いて。賤者いやしもの。ふ。似に。と。ま。ま。ど。も。色白いろしろ。ふ。り。眼まなこ中ちゆう。清涼しやうりやう。く。物ものの。い。ひ。ま。ま。進止しんし。一ひと。舞ま。ある。べき。面おもて

魂。年才の十六七もやありたん。渠の俺們主従と定うは認る外々いげは問訊するもの  
おのありぬ歎。いと訝し事ふこそ。といふは秋布領た。吾儕もまうと思ふなる。肥の州を  
る末の龍華ふ。吾亡夫の弟ある。瀬川浦二郎といふ壮俊あり。鄙の田舎ふ人とおまどもと  
さく文武の才闘あり。と倍太郎正延ぬの。物がたりよく聞さまど。我亡夫と彼人の素雙  
生ふありまき。その面影を一点違ひを。鏡映る影の如し。と定う傳聞ありた。こらに  
る初う腕社兒と。も龍華ありと聞え。浦二郎ぬはあらむやと思ひは。熱視さ  
る。その面影の一点ありも己が亡夫似ざりたり。うまき渠の。れのづうら列人よ  
く吾夫の弟ふありざる也。さると和殿のいへるが如く。俺們を認り。歎。偶中歎あらね  
ども。平人ふあらざめり善惡邪正。人の稟性。表面ふよれるものあらね。苟且も怪し  
人ふ。ものいひま。快うらむとく。ゆくてへ急ぐんとて。一里わり走りしが。既よ  
く疲勞あり。間も遠くありふけま。主従ややく心おちい。其處より又路を急ぐ。頃  
陸月の中流ふ。晝の暑小堪ざれば。是首の並樹。彼首の本蔭と屢憩ひたりければ。既よハ

帳へ請る比。日のおや西ふ傾きたり。かくては今宵浪速まで。ゆた著ん事叶ひが。黄昏時  
は造りあ。何處まき宿を討むべし。とうち相譚つ。社頭と退出。更ふゆく事一里許。こま  
より先途の曠野より。雖遠く人家あり。とうくまる程ふ。はや日の山の陝は没果。十六  
日の月の出たり。おほ幾町ゆき。今宵の宿ふあふらん。斯とあらば日の高くとも。  
八幡お留るべうり。と。悔し事とけり。と主従頻ふ臍と噬の。今さら八幡お返らん  
事も。却ふ適ふありぬ。いうようせん。と思ひ難は。復走ると數町より。但見ま前途の  
茂林の中。閃々として火の光。最も幽顯。主従齊一。歡び。原來彼處ふ人家あ  
り。とくゆた。宿と討んと。歩の運びと急。つら。の處に到る。見ま樹色と締結。と  
る。東面は福小ある木門あり。乗の素樸を柱。偏拵茶といふ。三大字と彫。飯とる。  
樟の生化石の偏額を掲げ。主従の月光。この光景と熱視て。田舎の道場。ら  
ん。女子と留るや。否と知らね。左も右もいひこしらへて。今宵の宿りを討んと。門戸と類  
ようち。和々。裏面より誰やと應つ。同宿の沙彌あるべし。紙燭と和立出。が左右をく

門と開らむ。間近く門口は立より。闕き見ると半胸ばかり。来まるもの誰と問ふ。登時俊平進より。これハ幡詰。浪速へ行く客あるが。思ひを路と食りより。宿投後まゝ難義及べり。伴侶ハ一箇の女子あり。その某が妹。弱き女子と道場へ留めがとく思ひ給ひ。よや檐下は立曉をも。露宿まるよ増よあらん。大慈大悲と垂給へ。と辭せ。よく憑むおん。裡面ある僧。これと聞。霎時俟ね。といひかけて走り。與へ。趕さしを。やうやくよ。いづく来つ。外面をさし闕き。行客達は物申さん。いひまよ。を菴主は告。容進らせよ。と許さま。とくこかへ。といひう々。角門と半開き。秋布主従と裡面は入り。手はやく門戸を引閉て。故の如くは鎖と。叔主従の業内をいつ。庫裏めたる處に到りて。誇と。客殿へ進め。登時五十むりある。住持の法師出迎へ。秋布主従は對ひ。いふやう。ちうた比の故あり。相識るもの。あらざま。ハ半夜とりとも止宿を許さむ。あうのあまども客人の軟弱と伴ふ。宿投難く難義のよ。聞々。了得は痛ま。且同行の女人おま。一箇の武士よ。いまれば。憑く思ふよ。

あり。枉く御宿と仕。ぬ。さ。バ。弱く美。た。女人を精舎に留んと。後聞も影護。背門の方。彌小。ある。一棟の空房あり。煤と塵埃。鬱悒あらん。今宵の其處。曉に給へ。あ。う。ま。ど。も。時。お。ほ。早。う。り。見。給。ふ。如。く。貧。院。よ。う。堂。宇。頽。破。ふ。及。び。う。う。バ。進。ら。ま。る。物。も。あ。り。割。麥。粥。と。焚。せ。ん。ふ。そ。ま。ふ。く。饑。と。交。ぎ。給。へ。といひ慰るある。態。俊。平。ふ。か。く。感。佩。ま。く。慈。悲。善。根。と。宗。と。給。ふ。活。善。薩。ふ。あ。ら。ざ。り。せ。バ。然。る。款。待。ふ。の。遭。ひ。が。さ。う。ら。ん。を。佛。縁。あ。り。く。佛。地。よ。宿。ま。し。こ。ま。俺。們。が。幸。ひ。ん。就。く。問。ま。ほ。う。ら。ん。の。相。識。る。もの。あ。ら。ざ。ま。ハ。半。夜。も。止。宿。を。許。さ。ひ。ど。某。が。武。士。あ。る。と。も。く。枉。く。一。夜。を。曉。さ。せ。給。ふ。と。宣。ひ。せ。し。る。ま。ろ。得。が。と。甚。麼。あ。る。所。以。の。あ。る。と。ふ。や。と。問。へ。バ。住。持。の。微。笑。て。その。不。審。を。理。り。な。れ。當。庵。の。念。佛。堂。よ。こ。の。地。と。偏。枯。林。と。い。へ。り。檀。越。講。衆。中。居。多。あ。り。一。鉢。糞。小。太。宰。の。經。高。が。逆。亂。の。聞。え。あ。り。よ。り。人。の。心。の。安。う。ら。ね。バ。諸。檀。講。衆。も。離。ま。り。これ。よ。よ。目。今。の。貧。道。と。只。一。箇。あ。る。徒。弟。の。荒。る。堂。宇。と。守。ま。り。差。さ。る。物。を。な。け。れ。ど。も。近。曾。強。盜。處。々。起。る。人。を。害。し。物。を。略。る。風。群。既。に。隠。ま。り。これ。よ。よ。下。晡。より。門。戸。と。い。や。く。鎖。固。く。相。識。ま。ら。ね。バ。止。宿。を。許。さ。む。

然れどもおん身の武士おまじバ、擊劔奉法は長給のん、萬一いつ惡黨が宵略ふうち入るとお  
らバ、暗號の土繩と鳴らまべー。當下おん身起出。強盜等と擊留給のん。只己が幸ひのさあ  
らむ。この近村の患を除く。功德のさしも莫大あらん。よりおん身が武士ある故。いと憑  
しく思ふといへり。も一爾るこのあらむとも。今宵むりる貧道師弟も、枕と高く睡るべ々  
れバ、打火の報ひの一錢も、望しうらむ候と。いと正首ふ説論せば、秋布は駭然と、側聞しつ、  
外視もふらず。俊平頼に感激して。いと巨細ある教解にて、一時の疑惑を散したり。現人家  
遠きこゝらでは、心細さも一入ならん。しからは今宵はいざとくして。とさく用心すべ  
れ。といふに住持は歡びて。とくく粥をまゐらせよ。と聲高やかに呼立れば、地爐に菴柴折  
焼て、炊ぎに隙なき件の沙彌は、二前の麥粥もて求つ、秋布主従に薦たる。あはせ物に  
は、糲秋漬の。舊し茄子も無色界。縁なき折敷も。冗たる枕も。時に取ては百味の飲食主従は  
箸を揚て。快く飲食しつ、淺からぬ管待の。よろこびと速て己ざれば、住持は差たる面色  
にて、客人達は聲音の坂東訛と聞ゆれば、鐘倉などの人にもあらん繁華なる地の人さまに。

汚穢く味なき麥粥を薦るの相應しからねど、辭語にいふなき袖の振りがたといふをい  
せん。然れども旅のをうりたるものまゝかふる。更も後々には、夜話の一つになりぬべし。夜の  
はや夜中とればしきにゆれて睡らせ給へかし。といふに主従歡びて、立まくすると、弟子  
の沙彌は、且くまたせ給へかし。と禁てまづ蒲團二つに枕をり添速しく、背門の空房にも  
てゆきつ。忽地にかへり来て。いといひがたきとなれど、俺們とても蚊帳はなし。されどもこ  
の地に蚊は稀也。嫌せ給ふともやと思へば、火盆と蟲遣草に、燂兒も添て彼處に措り。いざ  
／＼案内を仕らん。此方へ来ませ。と紙燭としつ、身を起しつ、先に立ば。秋布も俊平も  
其を勞ひつ。住持には、告辭しつ。覺束なくも、背門の空房に起さけり。さる程に、その夜も既  
に更闌て、丑三ごろにやあらんすらん。巻のうたに土繩うち鳴らして、盜賊入りぬ。と叫びつ  
、追ひつ追る、足音の手に拿る如く聞ゆれば、秋布とは間と隔し、俊平岸破と起揚り  
て、後室(秋布といふ)覺させ給ひ、か只今巻に強盜の入りたりと覺たり。巻主に約せし事  
もあれば、某は走向ひて、立地に殺奔して、止宿の報ひますべければ、裡面より戸とよく開

籠く。劍杖殴れ給ふ。といへば秋布も身と起し。已と得ぬ所行ありとも。大文の前の小  
事。賊の多少の知りがさからん。早まて。愆を給ふ。とこころと附き。頼き。そるこ  
ころ得候へども。然ればとて阿容く。外ふ。見らるべ。遠奴等何程の事。あるべ  
た。いでく。といひながら。刀と取。腰は跨へ。走り。巻ふ。逃げ。縁頼のほとり。よく。狼狽  
ぐ。沙彌ふ。あひぬ。賊を。什麼と。詰ま。沙彌の。怖る。聲。戦。客。人。賊。逢。う。師。の。坊。は  
や。綁ら。ま。物。多。く。略。ら。れ。さ。り。されども。賊。の。一。人。ふ。背。門。の。う。へ。只。今。ゆ。き。ぬ。籬。笆。と。ハ  
いま。ど。踰。べ。う。ら。む。追。覚。く。討。留。給。ひ。む。や。といふ。と。俊。平。聞。あ。へ。む。こ。ろ。得。さ。り。と。縁。頼。よ  
り。走。下。を。引。返。し。く。背。門。の。方。に。赴。く。沙。彌。も。後。方。に。従。ひ。来。つ。其。處。ふ。や。あ。ら。ん。彼。處。お。ら  
ん。といふ。と。俊。平。い。よ。く。進。み。く。空。房。の。背。に。到。ると。た。鈎。索。は。足。を。纏。ま。す。忽。撲。地。と。轉。び  
し。う。バ。物。蔭。に。躲。ま。居。る。一。箇。の。惡。僧。走。り。出。く。素。破。盜。兒。ご。ざ。ん。お。れ。といふ。より。た。やく。捕  
ま。押。へ。起。ん。と。ま。ると。起。り。も。立。む。た。や。森。々。と。縛。め。さ。り。俊。平。驚。き。且。怒。り。て。己。ま。は。是。盜  
賊。お。ら。む。甲。夜。お。宿。し。旅。宿。へ。人。違。し。後。悔。を。お。と。救。圍。お。が。ら。月。光。お。己。れ。を。縛。る。人

と見れば。是則。卷主の僧。俊平いよく。駭き。聖僧狂亂を給ひ。欺。己れの甲夜の旅  
客。賊といひる。覺をあらむ。といひせもあへむ。住持の惡僧。呵々と冷笑。この期。及  
く。陳むるや。汝が外。強盜か。骨と拉ぎ。責問を。いうでりの實と吐くべき。此方へ来よ  
と引立て。庫裡の柱。に。撃。ぎ。けり。その間。惡沙彌の。背。門。の。空。房。は。走。り。ゆ。き。て。秋。布。お。報。る。や  
う。同。行。の。旅。人。の。賊。と。擊。留。給。ひ。う。ども。その。身。も。深。敷。を。負。ひ。給。ひ。ぬ。疾。ゆ。き。見。給。ひ。む。や。  
といふ。と。秋。布。駭。き。走。り。出。つ。共。侶。ふ。ゆ。く。とい。ま。ど。い。く。バ。く。お。ら。む。又。鈎。索。お。絡。ま。す。忽  
地。に。轉。轉。と。惡。沙。彌。透。き。を。押。著。く。お。も。何。を。る。か。と。叫。ぶ。とも。聽。う。て。好。意。の。お。よ。や。り。お。る  
腕。を。背。へ。揉。揚。く。思。ひ。の。儘。に。縛。め。て。引。立。来。つ。俊。平。と。間。一。室。を。隔。る。柱。お。楚。と。擊。ぎ  
たり。然。る。と。て。秋。布。主。従。い。う。で。う。罪。お。伏。ま。べ。き。就。中。俊。平。の。惡。僧。師。弟。と。罵。り。つ。縛  
の。索。と。斷。ん。と。て。踊。揚。り。頻。に。狂。ふ。て。已。ざ。り。け。ま。住。持。の。惡。僧。冷。笑。ひ。て。遠。奴。い。う  
は。う。を。狂。ふ。とも。大。索。と。も。縛。ま。ま。バ。彌。勒。の。世。ま。で。斷。離。る。と。お。一。蹴。汝。等。争。ふ。て。  
盜。賊。お。ら。む。と。陳。む。ると。も。己。が。袈。裟。法。衣。と。金。三。兩。と。正。しく。竊。略。ら。れ。さ。り。論。より。證據。とい

ふ事あり。たやく彼奴が行囊と。もく来と見む。といそがせば。惡沙彌空房へ走りゆた。俊平が行囊と。小脇は抱きくへり来つ。中結解くうち開けば。油紙は色とる。一通の書状あり。こまらるをばよくも見む。この他兩個の雨衣と。割籠と被替の衣もありけり。うが間より出るものと。と見れば圓金三兩と。新一た袈裟法衣あり。さまばこそ賊物と。たやく行囊の内は隠しあり。こまらるの賊婦が受とせ。手むやく去るは疑ひあり。思ふふこの男女二人の。名ある盜賊ふこそありけり。人ふ油斷とさせん爲妍き女と伴ふとる。彼も此も相須利と。聖六波羅殿へ訴まうさば。首と刻るべきもの。這奴が腰の重やうある。居多の金と隠し持る敷。二三百兩あらんとおぼし。又女が懐に隠しもてる。短刀あらん。其も亦何處より。竊略とるものこそ。と兩箇の惡僧言語巧ま。まさくとく嘲るほど。秋布も俊平も彌呆き。倍怨とく。いひ合さねど共量る。這惡僧等の強盜あり。を。知らず。伎倆は乗せられし。武運は竭とる。過世の業報。かされば今更悔恨む。卻は惡僧あるべし。おもふよこの惡僧等の。言と心も表裏よく。いうて六波羅殿へ訴ふべき。天あけぬ程。小竊

は殺し。路費の財と略るからめ。君の免許と被り。仇討の宿志と得遂を今強盜の手死か。何人う亦如此くと。舊里人は言報ん。西國ふの浦二郎といふ。倍とくする親族あり。今茲彼地へ赴う。訪んと思ひ。甲斐もなく。今よりいく世ふる寺の茂林。骨と埋めやせん。見非もおれ身の果よこそ。と思ふものうら。主從齊一覺期を極め。争いを屠所の羊と。身とあせ。後世こそ人の大事なれ。彌陀佛くくと。心お唱る佛名も。音ふこそ立ね秋蟬の長うらぬ世と。啣言けり。うが中へ俊平の。再こころと思ふやう。こが後室の美人ある。彼奴等これと殺せとも。後室さまと。色里へ。售くおほその身價を。略んと搦るともやあらん。一旦活地獄へ。墮させ給ふとありとも。かん命ふごふ恙なく。神明佛陀の冥助より。宿志を遂させ給ふべし。如右せより。と今さら。果敢なき事さへ頼ま。祈念と疑らる。主おもひ。千々よ心と推さる。有斯之程は惡僧等の。送小雲時。再さ。高量既お整ひ。なん。いざと。住持の惡僧。板厨の戸と引開く。たやく取出を山刀。沙彌がもく来る合座の。穢桶。水水を沃ぎ入る。と。住持のやとら引よせ。寢刃合し。月額の毛と。試つ覺の所味。刃と

引提ひきひく俊平とんぺいが。不ふとりは立たちく憎にくさげよ。やとれ盗兒ぬせごよく聴きけよ。六波羅殿ろくはらどのへ牽ひもくゆきさく  
罪つみおのせんと思おもひしうども。生身なまみ二人ふたりをえるくくと。將しやうくゆくと丸まるい。途中ちゆうちゆうの失脚しつきゃく煩わづらしう  
く得とくもか。一途いつその更さらは頸くびましう贈おくまばさばり費つひまもあらむ。覺期かくどとせよ。と晃晃めうす刃やいばの  
光ひかりし秋布あきしほい。吐嗟あひやとバウリ氣きと悶もみ。寄よりまくまれど縛しばしの絆はたしの索あひ引留ひきとどめられ。臂居ありゐは控たうと  
轉まろびつ。聲こゑと惜をしま泣なみ沈しづめバ。磁桶じけい搔遣かきる徒弟てしの惡僧あくそう。あお罵ののや音高おとたか。勿泣なみく。と立たちよりく  
索あひとりつむ拿縮はしりる。真柱まはしらも現直げにちうらぬ邪慳じやくんの手料理てりやうり。既すでに住持ぢゆうぢの惡僧あくそう。刃やいばと晃晃りと揮揚振りあげ。たや俊  
平とんぺいが細頸ほそくびと。打落うちおさんとまる折をりう。何なんの程ほどふう潜寓しのひより々々。外面そのかたは立たち在ある竊聞たひきとる捕手とりての  
武夫ぶふ。從したがふ夥兵くみこ五六名にんご戸この節穴ふしあなより闖のぞきさくをり。吐嗟あひやや目今いま俊平とんぺい。身首しんしゆ處ところを異ことまふつべ  
た。危窮ききゆうと猜さいせし件くだんの武士ぶし。彼禁かれこめよ。と焦燥いらだちさる。聲こゑより速はやく夥兵くみこ等の板戸いたど踞す放はなちこま入いく。  
御誕ごじやうざふと呼より。手にく十手じつてをうち揮住持振りぢゆうぢと柱はしらて俊平とんぺいが。前後ぜんごは立たちたる勢いきほひよ不  
意いと打うまし。兩箇ふたにりの惡僧あくそう。こい乍そ度せいか奈何なにがと駭おどろ速あく。住持ぢゆうぢの刃やいばと拿落とりおし。沙彌さみの腰こしさへうち抜  
しけん。立たちまくまつ。幾遍いくたひう。尻杵しりきね春はるてを輾まろびたる。登時そのときの武夫ぶふは進まり入いり。左見さみ右見みみく。

住持ぢゆうぢは對むかひく威儀ゐぎ正ただしく。和僧わそうの本卷このいほりの主あるじよ。某事それがごとに六波羅ろくはらの北きたの正廳ほんどう。北條きたじゆう武藏助むさしすけ時  
村朝臣むらあそんの御内人みうちびと。海原うみはら澳進あうしんと呼よるもの。近曾おちぞう八幡山崎やわたやまざきの邊はたふ。強盜ごうたう隠住かくれるよ。その  
聞きこえあるよ。某仰それがしおみせと奉うけたまはす。追捕つひほの爲ために潜ひそて徘徊はいかい。夜よか。このさりを張ちかふ程ほど小さ。獨  
は湯ゆと巧こわせん爲ため。夥兵くみこは門戸もんこと敲たたせし。裡面うちは絶たえく應こたへ。女子をんなの哭聲なくこゑ聞きえたり。こゝろ  
得えがさく思おもふふあん。樹色いけがきを推破おしやぶし。士卒しそく齊ひと一進い入り。卷いほりの外面そのかたは近ちかづた。裡面うちの容  
と竊聞たひきせし。這男女このかんに兩ふた人にん。誤はかりし甲夜よひは宿やどりと討うめ。深夜よごかは物ものと竊たひとる。盜賊たうざいは終  
まふたよ。彼處かしこは在あり。定さだまは知しり。あうらば翌あす六波羅殿ろくはらどのへ。將しやうくまあり。祈うまうし。憲  
斷けんは依よるべきもの。然さると何なんや出家しゅつげし似にげなく。手てむうら殺ころさんとせられし。佛ぶつの慈  
悲ひは廻まるべく。猶且なほかつ國家こくがの法度はつどは違たがへり。某等それがしら討うめし。こゝろは采さいつるこそ幸さいひふれ。  
索附あつづの儘まま遞たとされよ。六波羅ろくはらへ將しやうくかへり。情由このわけを申まあぐべし。者共ものどもえやく罪人つみびと等らで受  
捕とらむ。と焦燥いらだちたり。登時そのとき卷主まきしゆの惡僧あくそう。跪かたみ頭かぶと搔かて。澳進あうしんがいふよ。うち聞きくあさり  
しけん。立たちまくまつ。夥兵くみこ等を速いそく推禁おしこめて。各位おののくし且かつく等給まちへ。海原殿うみはらどのの教諭きやうゆの趣おもひ。承伏しやうふく



大和言要後編卷之二

大和言要後編卷之二



せざるよあらねども命にかけて搦捕さる。巨盗と。この儘は各位へ通與てい。拘骨折る鷹  
 は捉らるるといふ。辭語も劣りたり。各々のまづ還らせ給へ。天も明バ當庵よ。將六波  
 羅へ參るべし。といひせも果を澳進の阿々と冷笑す。原米菴主の賊を捕へ。名聞と願る  
 敷。その某が職分。然るは出家のいふに任し。手を空しく還らんや。心もとなく思  
 われお。菴主も今よ。我々と俱ふ。六波羅へまゐり給へ。些も猶豫すべからむ。といひき  
 いと困りたる。住持の沙彌と目と注し。いひ釋よ。もあつ夜の晩方近くありまなり。  
 されバ秋布主従の。陳むる便宜と得ざりか。主客邪正の問答を。うち聞かむありが。  
 俊平の思ひかねてや。澳進よりうち對ひ。海原殿とやらん聞し召れよ。某等の盜賊おらむ。  
 這法師等こそ盜賊おれ。その故の箇様。といひせも敢て澳進を眼と睜し。聲ふり立ち。  
 這盜兒憚々。陳ればとて何と聞べ。夥兵達のこの盜兒等が。贓物と皆携。率立  
 てよ。といそがし。後立つて出く去。夥兵を秋布俊平が。素捕詰と追立て。いと本意  
 おげ目送りたる。兩惡僧の袈裟法衣。彼三兩の金さへ。もく行せしと禁めりね。齊一

歎息ととりける。畢竟秋布主従が。安危存亡甚麼ぞや。うる次の巻よ。解分ると聽ねう。



松浦佐用殿石魂録後編卷之二終

